

落語と宗教 〈の・ようなもの〉⁽¹⁾

川田 牧人

1. 宗教と民衆文化 いわゆる「Religion and Popular Culture」論からの視点

現代世界においては、一見すると宗教らしくないものがあえて宗教的な色彩を帯びる現象、あるいは、宗教のような装いをもとなっても活動の実態としては宗教と称しがたいものが頻出してきている状況がしばしば見受けられる。たとえば宗教社会学の分野においては、特定教団や宗派への統計上帰属は減少しており、宗教そのものの社会的プレゼンスは低下しているいっぽうで、「あの世」や「奇蹟」を信じる若年層の割合がふえ、「宗教っぽいもの」にはむしろ関心が集まっている様態が指摘される。この「宗教っぽいもの」について、平野直子は、セラピー文化のなかで商品やサービスとなって流通する現象、また、従来の宗教儀礼シンボルがメディアやサブカルチャーを経由した一種の「伝統」トレンドとなる様相をとりあげ、宗教共同体が個人を全的に拘束する時代から、「必要な時だけ対価（お金

など)を払って近づいて、用がなくなれば離れてよいので、気楽で自由な」消費連帯ともいうべきつながりによるものだと分析している〔平野2016:44〕。

宗教「っほいもの」というときの「ほい」とは、通常、そのものではない擬似的なものに対して用いられるが、往々にして真正的な部分を誇張したり強調したりする場合にも用いられる。たとえば男性の「女性っほい」しぐさとは、女性以上に女性らしさを強調するような態度や言葉づかいを指すことが多く、日本国内での「ハワイっほい」観光地といえば、椰子の木や白浜などを極度にデフォルメした光景を部分的に取り出して表現していたりする。つまり擬似的なものを通して、そのホンモノにまつわるイメージや作用が喚起されるのである。

本稿ではそのような事象に対して宗教人類学の立場から考えるというスタンスを基本的に持っているが、その際、宗教〈の・ようなもの〉とあえて言い換えて焦点化させる意図は、とりあげるのが落語だからである⁽²⁾。落語は宗教〈の・ようなもの〉どころか宗教そのものであるという見方もできるかもしれないが、その議論は後に検討する。まずは、落語という大衆芸能が現代の娯楽文化のなかに位置づけられるという観点から、一見、宗教そのものではないものが宗教的な色合いを帯びた特定の意味を獲得するという現象を考える端緒をさぐりたい。

このような議論は、近年の「宗教と民衆文化 (Religion and Popular Culture)」論の方向性と交錯するところがすくなく

いと考えられる。この研究分野は、宗教的伝統の民衆文化における表象のされかた、あるいは民衆文化が宗教によってうける影響を、「文化のサーキット」の概念を援用しながら文化の生産や流通、消費の側面を考慮しながら考察していく立場だとひとまず概略しておく⁽³⁾。現代世界における世俗化と宗教復興の対比的図式は、聖／俗の二分法について、その境界が固定的でなく両者が相互作用的な関係にたつことがしばしば起こることから、より微細な再検討を要する。ある社会における宗教的権威が非宗教的、とりわけ民衆的とみなされる事象と同調的であったり、宗教的なテキストが現代の日常生活における関心のもとで文脈化され解釈されたりすることは多々生じるからである。そこでは世俗化か宗教への原理的回帰かといった観点よりも、文学・映像・音楽などのさまざまな民衆文化的形態が、宗教的な形象・象徴・範疇の「可視的な媒体」となるような結託関係が問題になるわけである [Clark and Clanton Jr. 2012]。

「宗教と民衆文化」論にはいくつかの傾向がみられる。クラッセンの分類にもとづきながら、それらを概観したい [Klassen 2014:22-26]。まず第一に、民衆文化における宗教に焦点をあてる分野である。宗教的テーマや筋立てが民衆文化に多様に見いだされることをとりあげる傾向があり、たとえばメル・ギブソン監督の映画『パッション』やダン・ブラウンの小説『ダヴィンチ・コード』などにみられるように、現在の消費文化において一つの主流をなしているほどである。すなわち、コミックや映画、

音楽などの現代文化において、宗教的な想像性、物語、シンボリズムなどがいかにその生産にかかわっているか、また生産を通して人びとがいかなる文化行動をおこなうかに取り組むのが「民衆文化における宗教」という主題であるといえる。その逆が「宗教における民衆文化」という第二の研究傾向であり、これは民衆文化の多様な様式や技術、媒体を宗教的な組織づくりに何らかの形で取り入れていく方向性である。有名なのはテレビや、現在ではインターネット技術をもちいて基督教の福音化をすすめる「テレビ宣教 (televangelism)」などが有名である。また現代基督教音楽 (CCM; Contemporary Christian Music) は、ロックや R&B、ヒップホップ、ブラック・コンテンポラリーなど、さまざまな音楽ジャンルを組み合わせた媒体を創出することで、若年層への布教という宗教活動を担っている。さらに「宗教と民衆文化の (葛藤を含んだ) 対話的關係」という第三の研究傾向もある。そこではたとえば、伝統的宗教による倫理的指針に民衆文化が対抗軸を提供しうるか、「スピリチュアル」な構成要素なしに民衆文化は同様の倫理的指針を産出しうるか、宗教的实践者は民衆文化からいかにして「よき信徒」たるかを学びうるか、といった諸問題が議論される。

そしてもっとも議論が多く関心も高いのは、第四の「宗教としての民衆文化」という研究視角である。この分野は、ポップ音楽のファン行動やスポーツの観戦行動において、宗教と同様

の忘我や熱狂の心性がみられたり、映画『スター・トレック』に宗教的世界観を読み取ったりする現代の民衆文化の消費行動に、宗教〈の・ようなもの〉を見いだしていくという点で、本稿にもっとも近いかもしれない。このような研究傾向を端的に示したのが、デヴィッド・チデスターの「真正な偽物 (Authentic Fakes)」という考え方である⁽⁴⁾。チデスターがとりあげる野球、コココーラ、ロックンロールなどは純然たる宗教とはいえないが、視覚や聴覚など五感を通して宗教のように感じられる場合がある。逆に、インターネット上で増殖する宗教のように、あきらかに偽物でも宗教的活動をおこなうものもあり、このような両者の接近から、宗教における真正性が危機に瀕していると目する向きもある。宗教の仲立ちとなる民衆文化は、日常的な楽しみであると同時に人間の可能性や仮設仮構的な問いでもあり、その成り立ちには宗教が持っているような超越性、聖性、窮極性などがあらわれるものもある [Chidester 2005]。

本稿では、「真正な偽物」より幾分かは宗教に近いものの、あくまでも宗教そのものとも言い切れない〈の・ようなもの〉の典型として、落語をとりあげ、宗教と大衆文化の関係性を日本の土壌において考える試みとしたい⁽⁵⁾。以下には、宗教出自の落語がいかに大衆芸能として展開したか、そこにはいかなる点で宗教〈の・ようなもの〉を見いだしうるかを検討した後、宗教人類学の教材として落語を用いる可能性についての検討をおこないたい。

2. 大衆芸能、もしくは宗教〈の・ようなもの〉としての落語

先に宗教と大衆文化の議論を概観したのは、落語は一般に、大衆芸能（大衆演芸）というジャンルに分類されることが多いからで⁽⁶⁾、いずれにせよ大衆文化の一分野であるからである。またその考え方からは、落語が宗教〈の・ようなもの〉であるという見方もさほど無理なく受け入れられるように思われる。むしろ、落語は宗教活動そのものであったというべきであり、〈の・ようなもの〉という一步引いた地点からの議論はやや迂遠であるかもしれない。それは現在の落語の位置づけとしては、大衆文化、大衆芸能として扱うのが妥当であるという観点からの議論である。

このような設定において即座に問題になるのが、落語は伝統芸能か大衆芸能か、という問題である。これはいかにもやっかいな問題で諸説ありそうだが、少なくとも重要無形文化財保持者（人間国宝）が認定される芸能ジャンルとなったことは、落語が伝統芸能として扱われる傾向と関係しているように感じられる⁽⁷⁾。やたらと「古典芸能」とか「本寸法」といった言葉が珍重されるようになってきたのも、それと全く無縁ではないかもしれない。しかし人間国宝本人は、「伝統」、「古典」というくりにそれほどこだわっていないようで、たとえば柳家小三

治は、人間国宝に認定されるかなり前になるが、「よく伝統芸、
伝統芸なんてことを言いますが、あたしは落語なんてえものは
伝統芸ってほどのもんじゃないと思ってますよ。ま、筋書きぐ
らいは残っていますが、それをまあ登場人物の絡みとかね、そ
ういうものはありますが、決して伝統を守ろうなんていうね、
そんな気構えはいささかもないんでございましてね」〔柳家
2001:268〕と述べている。また、「よく古典芸能とか古典落語と
か言われてますけれども、古典というと、なんかお客さまの中
には、古典というぐらいだから、もとになるお手本、あるいは
教科書、原本、そういったものがあるんだろうと、こうお思い
でございましょう？ ところが、ないんです。どこにもないん
です〔柳家2001:248〕とも述べており、ある定型に固定化され
てしまうのとは逆のポテンシャルがあることを指摘している⁽⁸⁾。

もうひとりの人間国宝・桂米朝も、「落語は、古典芸能のは
しくれに入れてもらいまして、権威のある芸術性ゆたかな
数々の伝統芸能と肩をならべるのは本当はいけないのだと思
います。「わたしどもはそんな御大層なものではございません。
ごくつまらないものなんです」という…。ちょっとキザな気ど
りに思われるかもしれませんが、本来そういう芸なのです」〔桂
1986:215〕と述べており、あくまでも他の伝統芸能とは一線を
画して考えている。もっとも米朝は別のところで、「落語は広
く芸能全般の中では「大衆芸能」の中に入れられており、その「大
衆芸能」の中では定型化—すなわち、一種の古典芸能化が行わ

れつつあるのを危険視されている状態」[桂2004:110]であると指摘しつつも、「ここまで進歩した独特の話術、特殊な話芸、その力を用いてお客を魅了することができたら、古典落語と呼ばれようと、古くさいと言われようと、大衆芸能でなくなろうと、やれるところまでやってみよう。いや、もうそうなったら真の古典と呼ばれる価値のできるころまで、この話術を磨きに磨いてみよう」[桂2004:112]という境地にまで突き抜けていこうとした発言もみられる。このような指摘は、落語という演芸が伝統芸能と大衆芸能のはざまにあって流動的に位置づけられることを示している。

先の桂米朝によると、落語が明確に大衆芸能として位置づけられていたのは昭和10年代までとのことだが、その後も定期的に興隆期を迎えている。ことに近年の「落語ブーム」といわれる現象においては、たとえば2005～07年あたりは「タイガー&ドラゴン」や「ちりとてちん」などのテレビ番組による活性化、2010年以降は「どうらく息子」や「昭和元禄落語心中」などのコミックやアニメ作品による活性化など、複合的なメディアミックスの状況のなかで数珠つなぎの活況が続いてきたといえる。もちろんこのような大衆芸能としての位置づけは、明治～昭和期のそれこそ「各町内に寄席が一軒ずつある」ような状況とはかなり異なるが、他の大衆文化コンテンツと連携することによって、大衆芸能としての新たな深化をとげつつ着実に定着しているともいえる。したがって現代社会における落語は、伝

統芸能という性格も帯びつつも、基本的には大衆芸能としての消費がつづいているとみることが可能であろう。

こうした落語の大衆芸能化の流れで重要なのは、江戸末期から明治30年代まで活躍した三遊亭圓朝で、「近代落語の祖」とも呼ばれている。近代文学における言文一致体に圓朝の速記本が影響を与えたともいわれており、上述したような落語を通した多メディア連携の嚆矢とも考えられるが、関山和夫は「三遊亭圓朝は、説教と話芸の密接な関係を示す最後の人であった」[関山1978:126]と述べており、仏教的伝統の色濃い説教から話芸としての落語が独り立ちするその最終局面に彼の活躍が位置づけられるわけである。したがってそれよりさかのぼって専門的噺家が出現した江戸期には、宗教文化としての説教と大衆芸能としての落語が濃密な蜜月関係を継続させていた時期ということになる。そしてそれは、純然たる宗教者の立場をもった安楽庵策伝をはじめ、専門的噺家のプロトタイプとして17～18世紀の江戸中期にかけて、京の露の五郎兵衛、大坂の米沢彦八、江戸の鹿野武左衛門などが活躍した時期にも共通してみられた特徴であったと思われる⁽⁹⁾。

そこからさらに中世にまでさかのぼると、仏教の法話・説法のなかに信徒の関心を引いたり眠気を紛らわしたりするために笑い話が入り入れられており、落語は独立した話芸というよりその胚胎期ということになる⁽¹⁰⁾。どのように説法と笑いが結びついていたかについては、説教集などからうかがうことがで

きる⁽¹¹⁾。

このように落語と宗教の接近は濃厚に見いだせるわけだが、過去にさかのぼるほど宗教的メッセージのなかに笑いが用いられているケースが多く、逆に時代を下れば笑いの話芸としての落語のなかに宗教性を見いだすという、逆向きの包含関係が想定される。つまり前節の「宗教と大衆文化」論の枠組みでいえば、時代をさかのぼるほど「宗教のなかの大衆文化」の傾向が、逆に下れば「大衆文化のなかの宗教」というふうには包含関係が逆転するということである。そして現代における落語からは、主に後者が見いだせることを、以下に、『落語でブツダ』というテレビ番組をとりあげながら考えてみたい。

2013年12月2日から翌2014年1月27日まで、8回にわたってNHK（Eテレ）で放映された『落語でブツダ』は、文化史や文芸論の立場からではなく、仏教の立場から落語を解析するという趣旨にもとづいて、各回とりあげる各演目のなかに仏教の教えや世界観がいかに読み込めるかを探った番組であった〔日本放送協会（編）2013〕。毎回とりあげられた演目とその背景となった（講師の釈徹宗が読み込んだ）仏教思想は以下の通りである。

「仏馬」道ばたにつながれた馬を放して代わりに寝ていた坊主が、馬の持ち主にみつかってその馬の生まれ変わりだとごまかす。後で売られたその馬を市で見つけたその持ち主が、「お坊さんだということは、左耳の差し毛でわかる」。この噺では「縁起」と「輪廻」が主題となり、仏教思想においてものことが成

り立つための経緯がどのように捉えられるか、とりわけ生命の循環とつながりによって、いかに現実がつくられているかという点が解釈される。

「猿後家」猿に似た商家の後家さんに取り入ろうとする男が、禁句である「猿」を口にしたことでしくじる。失敗を取り繕おうとして、古来有名な別嬪に似ているとべんちゃらを言おうとするが、「ヨウヒヒに似ております」でまた失敗する。この噺で重要なのは、言葉によって現実が解釈されたりときには創出されたりするという点で、仏教的現実構成や、「十善戒」という仏教的戒めにおいて、言葉に対する規制がいかに働いているかが考察の対象となっている。

「甲府い」旅人の面倒を見た豆腐屋が、同じ法華宗だという縁で店で雇い、「とおーふい～、ごまいり～、がんもどき～」という呼び声を教える。やがて娘を嫁にもらって身延山へ願ほどきに行く段になり、「こおーふい～、おまいり～、がんもどき～」。この回の主題は「出世」、すなわち世俗的關係から離れるという仏教用語と、もうひとつは法華信者同士の連帯についてである。江戸の人びとの間で流行した法華信仰にもとづく社会相をうかがい知ることができる演目としても紹介される。

「松山鏡」親孝行の男が褒美として亡父との再会を願うが、もらったのは鏡。この男の松山村では鏡の存在が知られていなかったため、妻がこっそり鏡の箱を開けると女をかくまっていると激怒される。仲裁に入った尼さんが確認し、「中の女は後

悔して頭を丸めた」。この演目は仏教の認識論である唯識思想が背景にあり、主観に歪められた認識ではなくものごとのありのままを映す「大円鏡智」にいたることを説くための法話にも、この「松山鏡」のエピソードはしばしば用いられる〔黒瀬2016:47〕。

「菟蓐問答」廃寺の坊主として潜り込んだ男が、問答を挑まれて菟蓐屋の親分に助けを求める。無言のままのしぐさを菟蓐の値段交渉と勘違いするディスコミュニケーションが発生する。これは禅問答の形式をそのまま落語にしたような演目であり、ことばでは伝わりにくい「しぐさ」が多用されるのも特徴である。修行僧が小さな丸を両手でつくり「胸中は」と問うと、菟蓐屋は「お前のところの菟蓐はこんなに小さいだろう」に解し、大きな丸を作って「いやこんなに大きい」と反論するのを、修行僧は「大海のごとし」と誤解する。つぎに指を十本出して「十萬世界は」という問いを、菟蓐屋は「十丁でいくら？」という値段交渉にとらえ、五本指で返して「五百だ」という答えるが、修行僧は「五戒で保つ」と勘違いする。さらに三本指で「三尊の弥陀は」と問うと、菟蓐屋は「三百にまけろ」と言われていると思って、あかんべーをしたのに「目の下にあり」と理解して修行僧は退散するのである。

「お文さん」若旦那が見そめた芸妓をお店に入れるために計略を成功させるが、協力した丁稚は「さん」づけでその女性お文を呼ぶのを禁じられる。ある日、若旦那が御文章を読んでい

るのを「文を読んでいる」とご寮人さんに伝え、紛らわしいと咎められると、「〈さん〉をつけたら自分が放り出されます」。これもたいへんよくできた噺で、御文章の朗唱という真宗の宗教実践や、ふたつの本願寺別院（北御堂・南御堂）が並び立つ御堂筋沿いに展開した船場の商家の生活などが下敷きとなっている。

「宗論」浄土真宗を信奉する父親と、キリスト教に改宗したその息子との宗教論争⁽¹²⁾。自分の固定観念に固執する状態を示す仏教用語「偏執見」がこの落語の主題である。教義や信念の主観性はいわば宗教の根本のひとつであるが、それをも笑いの対象にして宗教を相対化してしまう。

「蛸芝居」芝居好きの商家に魚屋がやってきて、蛸を買う。料理されないよう逃げる蛸も芝居がかり、旦那に墨を吹き六方を踏んで逃げていく。丁稚に助けられた旦那は、「蛸にあてられた」。芝居話のある種のパロディとも受け取られようが、番組では仏壇のある日常の暮らしに焦点があてられた。

以上、番組で取り上げられた落語の演目を概観した。「菟菟問答」や「お文さん」のように、仏教の宗教実践そのものにまつわる噺や、法話にそのまま用いられる「松山鏡」のような噺、さらには「宗論」のように宗教の教えのちがいがそのものが笑いの対象になる演目までである。そうかと思えば、「猿後家」や「蛸芝居」のように、意識せずに聞き流してしまうと仏教色はあまり感じられないものが意外にも仏教思想や生活感を背景にして

いる場合もあった。いずれにせよ現在、大衆芸能として演じられる落語において、仏教は直接の素材となったりその背景や前提として用いられたりしており、宗教と演芸の関係の濃密さを確認することができるのである。そしてその関係の濃密さとは、落語を宗教〈の・ようなもの〉という表現にとどめておくものではなく、ある局面においては宗教そのものではないかとも思わせるような類縁関係であった。

3. 落語をもちいた宗教人類学入門

前節で検討した内容からは、落語と宗教の類縁関係はとりわけ仏教に特化して妥当するものであった。それは歴史的にみても、落語が仏教の法話や説教と切っても切れない関係にあり、いやそれ以上にもともと同根のものだからだと考えると当然である。しかしもう少し広げて、宗教全般と落語との関係を考えてたとしても、宗教そのものとは言えないまでも、宗教〈の・ようなもの〉としての側面はうかがい知れるのではないか、というのが本稿のそもそもの趣旨である。そしてその〈の・ようなもの〉の部分を用いて、宗教を人類学的に考える補助線をたどることが可能になるのではないか、といったことを、『落語でブツダ』のアプローチに接したあたりから個人的に試みていた。そこで、本節では宗教人類学の入門的科目においておこなったある応用について紹介したい。

筆者はかつて、「恐怖と笑い」を主題とした特殊講義の半期分を「笑い」にあて、そのうち数回で落語の演目をいくつかとりあげ、毎回一演目ずつ紹介しながら、そこに読み込まれる宗教人類学的主題について掘り下げていくというスタイルで講述をおこなった⁽¹³⁾。前節でふれた『落語でブッダ』のようにじっさいの落語の演目から入り、しかし仏教用語・思想・実践を読み込むのではなく、宗教人類学の重要概念や主題によって「深読み」していこうとする試みであった。以下には各回で取り上げた演目を簡単に紹介し、その演目がどのようなねらいで提供されたのかを解説し、それに対する学生の受容のされ方をリアクションペーパーの記述から検討したい。

a. 「もう半分」

永代橋のたもとにある造り酒屋に通ってくる野菜行商のじいさんは、酒の飲み方に癖がある。一合ではなく「半分だけ」といって五尺ずつ注文するのである。主が聞くと、「酒飲みの意地汚さで、こうやると余計に飲める気がする」のだそうだ。そのじいさんが、ある日、風呂敷包みを忘れたまま帰ってしまう。主が中を確かめると、なんと五十両の大金。じいさんに返しに行こうとする主を女房が止め、「忘れる方が悪いんだよ。もらっちまいなよ。店を広げる元手になるよ」とそそのかす。やがてあわててとって返したじいさんに、知らぬ存ぜぬで通した主は、いったんはねこばばを決めこんだものの、いい気がせずにやは

り返そうと後を追うが、ひどく落胆したじいさんは、酒屋夫妻に恨みのことばを残したまま永代橋から身を投げて命を絶ってしまった。このような悪事にもかかわらず店は繁盛し、やがて店を広げるまでになり、さらに子宝に恵まれる。ところが生まれた子どもは生まれただてにもかかわらず白髪ですでに歯も生えていて、ちょうどあの野菜行商のじいさんそっくりである。赤子の顔を見たたん、女房はぎゃって言って気が上がって死んでしまった。仕方がないので乳母をやとって赤子の世話をさせるが、何日も経たないうちにやめていく乳母ばかり。どういわけかと主がある晩、赤子が寝付いてからも見張っていると、深夜になってむっくり起き上がった赤子が這って行灯のもとへ行き、その油をぺろぺろとなめている。おのれ化けて出たな！と主が思わず声を立てると、その赤子が主の方を向いて「へへ、もう半分ください」。

この演目で掘り下げたい主題は「前世の記憶」と「生まれ変わり」である。中込重明は以下のように述べて、この落語の特殊な位置づけに注意を喚起している。「笑いを本願とする落語としては、この「もう半分」という噺は異色であり、また三遊亭円朝の怪談噺のようなジャンルに入れるにしても、噺のもつスケールなどからいって考えざるを得ない。笑いの部分も決して多くなく、様々な意味で奇異な落語であることに間違いない」[中込1993:238]。そしてこの落語の構成要素として、猫ババ、油なめとならんで「転生復讐譚」という点に力点をおいて分析

しており、そこには仏教説話の背景があると結論づけている⁽¹⁴⁾。特定の宗派や教団に限定することなく、人間の生死のつながりやあの世とこの世との交流に関する思考や信念という形で主題を広げるために、ここでは「前世の記憶」に関する資料も提示する。

〈学生コメントより〉

- ・この話が一番面白かった。テーマとも合っていたし、カネと欲にまみれ、後悔しながらもやはり悪事をしてしまう男の心情がよい。
- ・「もう半分」は面白くも、ちょっと怖く、授業のテーマとよくマッチングしていて、非常に興味を持ってきくことができました。授業の各所で落語に結び付く部分があって、とてもおもしろかったです。

b. 「鯀沢」

日蓮宗の総本山身延山に参詣に行った旅人（新助）は、帰路、道に迷い、激しい雪道のため遭難しかかる。お題目を唱えながらなんとか人家の灯りを見つけ、その家の女に一夜の宿を頼み込む。家にあげてもらい囲炉裏にあたらせてもらい、やっと人心地ついてあらためて女を見ると、どうも見覚えがあり、浅草の遊郭に遊びに行ったとき相手をしてくれた花魁ではないかと言いつける。今はお熊と名乗っているが、店の男と心中の仕損ねがもともとで駆け落ちして、おもに男の熊の膏薬売りで生計を立

てているという。旅人は一夜の宿の礼にと小判の包みを切って何枚かわたし、お熊は卯酒をふるまう。夫のための酒を飲ませてしまったので、酔いが回って旅人が寝てしまうと酒を買い足しに出かけ、ほどなく入れ違いに夫が帰ってくるが、旅人の飲み残しの卯酒を飲むや、苦しみだす。ちょうど帰ってきたお熊が、旅人がもっている大金をまきあげようと卯酒に毒を仕込んだからくりを話すと、隣室で聞いていた旅人は、殺されてはたいへんと、小室山で授かった毒消しの護符を雪で飲み下すと雪闇のなかを逃げ出す。夫の鉄砲を持って旅人を追いかけたお熊は、東海道は岩淵の宿へ通じる鰐沢の淵まで旅人を追い詰める。前は崖、後ろからは鉄砲をもったお熊に追われて進退きわまった旅人は、「南無妙法蓮華経」と唱えながら雪を滑り降りるとつないであった筏の上に落ち、流れ出す。岩にぶつかり筏はばらけ、そのうち一本の材木にしがみついて逃げていく旅人に狙いを定めたお熊は引き金を引くが、後ろの岩に「かちーん」。「この大難を逃れたのも御利益。お材木（お題目）で助かった」。

この演目は何かといわくつきである。原作者は先述した江戸末から明治期にかけて落語中興の祖として活躍した三遊亭円朝であり、しかも創作の中でもアドリブ性が高度に要求される「三題噺」というスタイルである。すなわち客席からお題を三つ取り即興で作り上げる形式であるが、その三つのお題とは「卯酒」、「鉄砲」、「毒消しの護符」（「熊の膏薬」、「遊女」、「身延詣り」などが入っていたなど諸説ある）であるといわれている。ある

いは四代目橋家圓喬がこの噺の名手で、真夏にこの演目をかけたところ、客は団扇の動きを止めて聞き入っていたといったこの噺にまつわる「名人芸」によって増幅されがちである。先の「もう半分」と同じく、一般に笑いどころは少なく、むしろミステリのような切迫感がある。この演目から考えられる主題としては「異人殺し」である。さらに「もう半分」とつなげると「こんな晩」という口承文芸研究のモチーフを設定することもできる。「もう半分」において、八百屋の爺さんは自害するのだが、それが「異人殺し」によるものであった場合、「お前が殺したのはこんな晩だったね」と生まれ変わってくるところに、現世の内と外、さらにその外部に広がるあの世、という入れ子構造を読み取ることができ、生命論と世界観という宗教人類学的主題を考える材料になる。

〈学生コメントより〉

- ・道に迷って偶然見つけた家で殺されそうになる主人公がかわいそうというイメージが強い。「毒消しの薬？」を持っていたのがすごい。

c. 「死神」

金策に困った男が首をくくろうとしたところへ現れた死神、「お前はまだ寿命じゃないから死ぬな」といって、医者になることをすすめる。病人の足許に死神がいれば、呪文を唱えて退散させればいい。ただし枕元にいる死神に対しては何もしては

いけない。じっさい試してみると、呪文を唱えれば死神は消え、病人も全快するというので、この男はたちまち大金持ちになる。しかし儲けた金を放蕩三昧で使ってしまい、再度治療をしようとする、今度はいつも枕元に死神が座っているので治すに治せない。そんなある日、豪商の旦那の病床に呼ばれ、何とか治してほしいと大金を積まれ、つい欲の出た男は、死神が寝こけている間に寝床を180度回転させ、枕元にいるはずが足許に回ってしまった死神に呪文を唱えて退散させてしまう。怒った死神が男を地下界に連れていくと、そこは灯のともったロウソクで一面埋め尽くされている。その中の一本、今にも消えそうなロウソクがお前の命だ、その灯が消えるとお前は死ぬと言われ、何とか助けてくれと死神に頼み込む。一度だけのチャンスとして、別のロウソクに灯し替えられれば助かることを教えられるが、手が震えてどうにもうまく灯を移せない。「ほらほら、早くしないと消えるぞ。震えると消えるぞ。早くしろ早くしろ、ああ、消え…る」(といって演者がバツタリ倒れたところでサゲになる)。

この噺には「誉れの幫間」という別バージョンがある。食い詰めたたいこもちの男が死神の勧めで医者になり成功し、というあたりは展開が同様であるが、ロウソクの灯し替えに成功し、地下の消えそうなロウソクを全部長いものに継ぎ足して地上にもどってくる、という逆パターンの結末である。これは正月などめでたいときに縁起のよいサゲにするため、考案されたもの

らしい。したがって、最初はおかしかった話がだんだん恐怖譚めいてくるといふ笑いと恐怖の境目ということだけが、この噺の勘所ではないだろう。むしろ生と死の境目が完全に分断されておらず、行ったり来たりできるという点に、この噺の魅力が見いだされる⁽¹⁵⁾。そしてこの生死の境の曖昧さというのは、儀礼論や供養論といった宗教人類学的な素材を考えるとときの基本概念を提供してくれる。

〈学生コメントより〉

- ・落語という、笑うものだと思ってたが、怖い話もあることを知り、その中でも怖い作品だった。鑑賞した中で、一番印象のつよい作品だった。
- ・一度聞いたことがあったので、なじみやすかったです。自分が知っていたサゲは無事ロウソクをうつしかえることができた主人公が、安堵のため息をつくことで灯が消えて死ぬ、というものでした。語り手によってサゲが色々かわりおもしろかったです。
- ・ホラー系はにがてなのだが、落語になるとホラー要素がマイルドになり、オチも少し笑えるおもしろいものだった。

d. 「たちぎれ線香」

船場の大店の若旦那が、あまりにお茶屋遊びが頻繁だといふので勘当されかかるが、番頭の機転で百日の蔵住まいと決まる。若旦那が外界に出られなくなると、馴染みの芸者・小糸からは

毎日手紙が届くようになるが、番頭はそれを蔵の中の若旦那には届けず、自らのもとに保管しておく。やがて八十日を境に手紙はぷつつりと絶える。百日が過ぎ、若旦那が外界へ出たとき、番頭が保管していた手紙の束をわたし、その一番最後に来た手紙を開封すると、「御越し下されなき節は、今生にてはお目にかかれまじく候」とあるのに驚いた若旦那は、さっそく小糸の店へ向かう。小糸に会いたいといわれた女将は仏壇の位牌を示す。いわく、若旦那に恋い焦がれてわずらい、手紙を書き続けたが返事もなく、ついには食事も喉を通らなくなり、ちょうど出来上がって届けられてきた若旦那の特別詠えの三味線を構えたまま、息絶えてしまったのだという。若旦那は線香をあげて供養し、仏壇の前で酒をのみはじめると、どこからともなく三味線の音が聞こえてくる。若旦那の好きな地唄の「雪」である。小糸が応えてくれたかとしみじみと聞き入っていると、突然、三味線の音がとまる。何でや、なんでもっと弾いてくれへんのや、と若旦那が問うと、女将は「若旦那、小糸はもう弾かしません。お仏壇の線香が、ちょうど立ち切りました」。

この噺は桂米朝が「数百を数え得る上方落語中でも屈指の大ネタで、これは古来、偶像視されてきた噺です」[桂2014:40]と紹介していることで、すべて語り尽くされているようなネタである⁽¹⁶⁾。ただし現在では、最初に説明が必要である。時計のない時代、芸者の花代は線香で数えていた。線香一本が立ち切るといくら、延長するときはもう一本たててまた時間を計る、

というシステムで花街の遊びが成り立っていたのだという。これがわからないとサゲがわからない。それだけでなく、滑稽話ではなく細やかな情愛の描写が必要とされるので、人情噺の少ない上方落語にあっては別格のように扱われるのだが、学生のウケはけっこうよかった。主題として「異界からのメッセージ」を設定するとシャーマニズムや託宣などの宗教人類学的トピックと接続しやすいし、また三味線の音が死者とのつながりを示す点をクローズアップすれば、フェティシズム論などへも展開できる。

〈学生コメントより〉

- ・作品自体が面白かったです。恋人の歌を聞けて、良いところで消えてしまい、その理由が対応時間切れというのに笑いました。
- ・落語にはあまり馴染みがないため、オチなどを上手く理解できない方である。しかし「たちぎれ線香」はオチ（というかサゲ）が分かりやすく、落語の形式を少し理解することができたように感じた。「藁人形」も同じ感覚になってしまうが、ワラ人形を打ちつけるのと方法が異なるが呪いの形式が目視できる言い回しになっていて面白い。
- ・線香がのぼっている間、しゃみ線の音が鳴っている場面が印象的だった。

e. 「藁人形」

乞食坊主の西念は、千住の女郎屋に足繁く通ってくる。芸者の一人おくまに、絵双紙屋を買い取って、そこに西念を引き取って世話をしたいという相談を受け、二十両を用立てる。ところが後日、おくまはその金をだまし取ったことが判明したが、証文を交わしたわけではなし、取り戻すすべもなく女郎屋を追い出されてしまう。それからというもの、家に閉じこもりきりになった西念のもとへ、甥の甚吉が訪ねてくる。かかっている鍋の蓋を取るなど言い残して西念が外出した際に、甚吉はそっと鍋の蓋をとると、中には煮立った油の中に藁人形が入れられている。恐ろしくなって蓋を閉じたものの、帰ってきた西念に蓋の位置がずれていることを指摘され、中を見たことを白状すると、西念は一件を説明し、おくまを呪っていたのに、人に見られてはもう呪いは効かないと落胆する。力になることを誓った甚吉が、それにしても丑の刻参りと言えは五寸釘と相場が決まっているのに、なんで藁人形を油で煮るのかと訊ねると、西念は、「釘じゃ効かねえんだ。あのおくまというのは、もとは糠屋の娘だ」。

この噺の出典は謡曲「鉄輪（かなわ）」である。夫の不倫を恨んだ女が赤い衣に頭上に鉄輪をいただくという定型で貴船神社に丑の刻参りをする。男は安倍晴明の呪力に頼ったため女は近づくことができず、「こいつは鉄輪ねえ」と退散するという、地口のきいた筋である。これが上方落語の「丑の刻まいり」を

経て「藁人形」になった [宇井1983:168-171]。出自からして呪いであり、提示する主題は呪的行為や、とくにウィッチクラフトとソーサリーである。

〈学生アンケートより〉

- ・オチが人形の呪術性だけでなく、ぬか屋をのろうためにクギを避けるというタブーになっているのも面白かった。
- ・やっていることは、藁人形を油に入れて煮ているから、怖いことだけど、「ぬかに釘」というオチを入れて笑えたから面白かった。“恐怖と笑い”のテーマに合っていた。
- ・「ぬか」を言葉あそびしているところになるほどと思った。藁人形は現代にも伝わっているので、わかりやすかった、

f. 「猿後家」

六つのうちひとつは『落語でブッダ』と同じ演目を学生にぶつけてみたかったので、前節でも紹介した猿に似た後家さんに対する禁句を口走ってしまい、汚名回復と再チャレンジするもまたまたしくじってしまうという噺をとりあげた。ただし、「十善戒」という仏教的戒めに限定せず、ひろく禁忌、タブーを考えるためのとっかかりとして提示した。

〈学生アンケートより〉

- ・禁忌というテーマは重く感じられ、ある意味、触れてはいけないもののような感じがするのに、それを落語で笑いに変えるという発想がおもしろいと思った。

- ・現在でも昔からの言い伝えや都市伝説のような形でタブーなことは特定のときなどでは特に気をつけなければならないことなので、身近に感じた内容であった。

4. 笑いの宗教人類学へ

以上のような試みを通して言えるのは、落語という大衆芸能を通して、死後の世界や生命の行方など生命観に関する視点や思想、生／死や現世／来世といった対比を架橋するものへの観念、現実世界における実利的行為を超越した象徴や儀礼的行為（呪術やタブー）といった宗教人類学でとりあげられるトピックの多くは、落語という入り口を用意することによって、学生層にも受容しやすいように提供できるのではないかということである。学生コメントを見ても、たとえば「たちぎれ線香」において、線香の煙と三味線の音色がシンクロする叙情的な場面を捉えたり、「猿後家」において禁忌の重厚さを笑いに逆用するという落語的仕掛けに気づいたりするなど、学生の受容力にも大いに助けられている。今後、宗教人類学の入門的授業のプログラムとして、どのような概念やテーマを設定しなければならないかは十分吟味する必要があるが、それに合致した落語演目を紹介して宗教〈の・ようなもの〉として提示する方法には、一定の有効性があるのではないかという見通しを得ることができる。

各作品ごとの印象と宗教人類学的主題との関連性の習得について、授業最終回におこなったこの授業独自の受講生によるアクションをもとにして、やや詳しくみてみよう。

まず、授業で取り上げた6つの作品を「おもしろかった」順に1位から6位まで番号をつけてもらい、それを平均して数値が少ないものからならべると、次のような順番となった。

- 1位 「死神」
- 2位 「藁人形」
- 3位 「たちぎれ線香」
- 4位 「もう半分」「鯀沢」(同率)
- 6位 「猿後家」

つぎに、その作品から授業で取り上げた宗教人類学上の主題にどれくらい関連があるかを五段階（5 = とても関連がある、4 = やや関連がある、3 = どちらともいえない、2 = あまり関連がない、1 = まったく関連がない）で判断してもらったところ、下のような結果になった。冒頭の数字が評価点の平均、()内は筆者が想定した主題である。

- 4.21 「藁人形」(呪術・妖術・邪術)
- 4.12 「死神」(あの世とこの世の境)
- 4.00 「もう半分」(生まれ変わりと前世の記憶)
- 3.93 「たちぎれ線香」(死者からのメッセージ)
- 3.65 「猿後家」(不行為と禁忌)

3.52 「鯀沢」(異人殺しと呪術的逃走)

全回答数は25であり、そのうち数枚は無回答のものもあったので、母数としては小さすぎて傾向を指摘するには不十分であるかもしれないが、おもしろかった順位の上位をしめた「死神」と「藁人形」は授業の主題についても関連性をよく認識しており、逆におもしろさの度合いで下位の「鯀沢」や「猿後家」では設定した主題に関連しているという認識も低下することがわかる。これは、演目がおもしろいからその主題も飲み込みやすいのか、主題が明確であるので癖も印象に残りやすいのか、あるいはそのような因果関係ではなく単なる相関関係を示しているだけなのかは即断できないが、上位クラス(「死神」と「藁人形」)、中位クラス(「たちぎれ線香」と「もう半分」)、下位クラス(「鯀沢」と「猿後家」)それぞれで対応しているのは興味深い。作品を厳選しテーマ設定に工夫を凝らせば、落語という宗教〈の・ようなもの〉から宗教そのものを考える有効性が見いだせるという先の指摘を裏付けするような授業アンケートであるといえる。

個々の作品ではなく全体として、このような授業スタイルはどのように受け取られたであろうか。最後に落語を通して宗教〈の・ようなもの〉を考えるという授業スタイルそのものをやはり五段階で評価してもらったところ、5は7名、4も7名、3が5名、2は4名(無記入が2名)とかなりばらつきを見せた。

これは個々の受講生の笑いに対する感性のちがいがいも少なからず反映されていることが推測される。たとえば評価5の感想としては、「(これまで落語は) 娯楽として楽しむだけだったので、文化人類学的視点から分析するということがそのものが新鮮で面白かった」、「きょうみ深い内容であったし、題目にそった映像でやりやすかった」、「分かりやすい授業であることがなかったため満足である」といった好意的な評価が多い。評価4でも「落語をはじめにきいて、あとで解説があったので、その話のことがよく分かり、そこから宗教人類学のテーマに入るのであきずに講義をきくことができました」、「その日の授業テーマを見て改めて落語の内容がはっきり理解できたり、後からそういうことだったのかとわかる鑑賞がおもしろかったです」といった感想があり、落語の演目と宗教人類学の主題を関連づけるのに成功すれば、理解の助けになることがうかがえる。しかし評価3あたりになると「落語になれていないので、話のスピードについていけなかった」や、「落語は私にとって笑いに入らないため、落語がはじまってからは授業がつまらなく感じました」というように、落語という芸態に対して耳を閉ざしてしまう逆効果もあることがわかった。多くの作品を見せるのではなく厳選した1、2作品に限るとか、一つの作品の要所だけやダイジェストを短時間で見せるなど、検討課題も見いだされた⁽¹⁷⁾。

ただし、落語そのものに対する慣れは実は副次的な要因であるかもしれない。「落語自体、一度も真面目にきいたことがな

かったので新鮮で、授業と関連性の高いものを先生が選んでくださったので、授業もわかりやすく感じました。…今後もこの形態で授業していかれると面白く楽しく受けられると思えました」というふうに、自分にとっての未知の領域に対して肯定的にかまえている学生もいたからである。自分が知っているものに対する慣れからではなく、自らの知識がおよばない領域から不意に襲来するものへのリアクションとしての笑いというものもたしかにある。そしてそれは宗教人類学だけでなく、およそ学と名のつく営みのひとつの作用ではなかったか。

註

- (1) 本稿は、国立民族学博物館共同研究「宗教人類学の再創造—滲出する宗教性と現代世界」(2013年10月～2017年3月、研究代表者：長谷千代子)への参加によって可能になったディスカッションから多くの教えとサジェスチョンを得ている。共同研究の成果論集には諸般の事情により寄稿できなかったが、ここに記して謝意を表したい。
- (2) いうまでもなく『の・ようなもの』とは、1981年公開の映画(森田芳光監督、伊藤克信主演)のタイトルである。出船亭という架空の一派で修行する二つ目落語家を中心としたストーリーであるが、タイトルは「居酒屋」という演目のなかのセリフ「できますものは、…アンコウのようなもの」からきている。なお、2016年には『の・ようなもの のようなもの』(杉山泰一監督、松山ケンイチ主演)が公開された。これは続編というべきか、あるいは前作へのオマージュであるともいえる。

- (3) 2015年にはこの研究分野の主要な研究内容を網羅的に紹介するいわゆる『必携書』(Routledge Companion to Religion and Popular Culture.)も刊行されている。その内容は、方法論、民衆文化の各内容、宗教伝統における動き、の三部構成からなっており、とくに第二部では、テレビ・音楽・インターネットなどのメディア文化、食物・ファッション・玩具や人形などの物質文化、ショッピング・スポーツなどの人間活動などにわたってひろく民衆文化が捉えられている [Lyden and Mazur (eds.) 2015]。ちなみに「文化のサーキット」とは生産・消費・表象・規則化・アイデンティティの5つの側面を相互関連的に経由しながら文化の実践様態を考えるカルチュラル・スタディーズ由来の概念である(小川葉子(2003)「第9章 グローバリゼーションと文化のエージェンシー:カルチュラル・スタディーズと表象の場を/から逆照射する」正村俊之編『講座社会変動6:情報化と文化変容』ミネルヴァ書房)。
- (4) 筆者はかつて、「シンセイなる擬いもの:生産・流通・消費の諸活動からみたフィリピン・ビサヤ地方の聖像祭祀」という口頭発表をおこなった(日本文化人類学会第47回研究大会(慶應義塾大学)、2013年6月9日(日))。英訳すると authentic fakes で、チヂスターの書名のバクリとなってしまう。これは意図的なものではなく、恥ずかしながら当時は同書が存在を知らなかった不勉強ゆえのこととして、お許しいただければさいわいである。ただし筆者の口頭発表題名は「シンセイ」が「真正」と「神聖」ならびに「心性」の地口になっているところが、日本語ならではのオリジナリティであると付言するのは、あまりにも野暮であろうか。
- (5) 正確を期すならば、民衆文化は大衆文化(mass culture)と厳密に区別されなければならないかもしれないが、両者の区別については相当な議論を積み重ねる必要があり、本稿の紙数では不可能である。ただし、High Culture に対する Popular Culture は、近代以降のマスメディアを経由した生産・流通・消費のプロセスをともなった運動であることが多いことを勘案すれば、「宗教と大衆文

化」として考えることも可能である。ここでは、「(popular culture とは) 通常はマスメディアを通して産出されたものが広範に普及し、大多数のひとびと、とくにその社会の非エリート層に受容されること」[Mazur and McCarthy 2011:7] といった言及をふまえ、以下では、popular culture を「大衆文化」として考える。

- (6) 矢野誠一は「大衆芸能としての落語」という文章のなかで、福田定良『民衆と演芸』（岩波書店、1953）の定義を参照しつつ、①大衆という受容者層の存在、②興業資本の対象となること、③民衆出自の伝承性などについて言及する。さらに鶴見俊輔「大衆芸能とは何か」（『伝統と現代』8号、1969）における見解、④高級な伝統と一線を画すこと、⑤受容者層である大衆による再生産の可能性、などについても着目している [矢野2008]。なお「大衆芸能」と「大衆演芸」は、ほぼ同義として用いられることも多いが、ここでは、大衆芸能のうち、大観衆を前提とする劇場や路上ではなく、寄席などの限定的空間で比較的少人数を対象に演じられる芸としての落語、講談、浪曲、漫才、奇術をさすものとする。
- (7) 落語分野における人間国宝認定の第一号は、1995年の五代目柳家小さんであった。ついで1996年には三代目桂米朝、2014年には十代目柳家小三治が認定された。なお米朝は、2009年には落語家としては初めての文化勲章を受けている。
- (8) じっさい小三治の落語は、精緻な人物描写やゆったりとした間による噺の時空間の創出などとともに、演目に入る前の「まくら」にも定評があり、ときには演目に入ることなく「まくら」だけで終わってしまう場合もあるくらいである。そこには定型の演目に固定化されないなものかを表現したいという演者なりの工夫が感じられる。本文中の引用も、その「まくら」を編んだ著書からの引用である。
- (9) 落語の開祖については諸説あり、一般には、安楽庵策伝といわれることが多い。関山和夫は「安楽庵策伝和尚は、浄土宗の説教師であり、落とし噺を高座で実演し、その数々の小咄を『醒睡笑』
- (98)

八巻にみずから集録して後世に残したために、その実績が認められて「落語の祖」といわれる。これは、寄席演芸の世界で「――の祖」という表現が近世後期から近代にかけて盛んに行われたことから、安楽庵策伝もその風潮の中で「落語の祖」と贅えられたのである」[関山1991:18]と述べている。これに対し、四代目桂文我は次のように異を唱える。「安楽庵策伝は落語を演じて得た収入で生活したわけではないので、策伝を「噺家第一号」と定めるのは、「本当にそうかな？」と疑問に思いますから、記録に残る最初の噺家は「露の五郎兵衛」と言い切っても間違いないと思います」[桂文我2006:11]と記している。たしかに演者の立場からその始祖は誰かと問う視点として、文我の指摘は興味深い。ちなみに、木下昌輝『天下一の軽口男』(幻冬舎、2016)は、小説ながら、米沢彦八を中心として、露の五郎兵衛や鹿野武左衛門などの技芸の交流を想像力豊かに叙述しており、たいへん興味深い。

- (10) 歴史的に説教と話芸がいかなる関係性を展開させてきたかについては、重厚な研究が蓄積されており、ここではまとめることはできないが、関山和夫の研究に詳しい[関山1973、1978など]。また、落語のなかにいかなる宗教性が見いだせるかという主題を追究する釈徹宗の研究も着目すべきであり、そこでは落語と説教の歴史的展開に関する考察もなされている[釈2010、2017]。
- (11) 『大笑小笑』は、浄土真宗の僧侶・黒瀬知圓が大正年間にまとめた説教譬喩集であるが、中世以来の説法のスタイルを彷彿とさせる。この中でたとえば「勝手聞き、得手聞き」という項には、徴兵を逃れたい男が耳が聞こえないふりをするが、兵隊にはとらないと言われつい「ありがとうございます」と返事をしてしまう話、馬方が客に酒代をせびるために景気のよい客の話をする、客は寝たふりをしてごまかすが、今度は客が豪儀な馬方の話をする、馬方は歩きながら空いびきをかく話などがちりばめられている。前者は口のきけない男に置き換えると「啞の釣り」という現在でも高座にかけられる演目となるし、後者は馬を駕籠に換えれば「蔵

前駕籠」のまくらなどに語られる「いびき駕籠」であることがわかる〔黒瀬2016:105-106〕。

- (12) この演目は演者ごとにサゲが工夫されている。放送でのサゲは、親子喧嘩を仲裁した番頭が、大旦那に再婚を勧め、どんな女性が理想かときき、「細川ふみえのような女性」というと、若旦那は「踏み絵だけのご勘弁」。多くの演者は、「宗論はどちら負けても釈迦の恥」と仲裁に入った番頭に対し、「その教えを知っているとは、お前も真宗か」と問う大旦那に対し、「いいや、おら奥州だ」とか「上州だ」などとサゲる。
- (13) この講義について補足しておく、もともとは恐怖・畏怖の宗教的心理を中心に講義するなかで、二回ほど落語をとりあげていた。その頃からの演目は、本文で紹介した「もう半分」と「鯨沢」である。その二回で落語を“教材”とする感触が得られたため、全体の主題として「恐怖と笑いの宗教人類学」を設定した。その初発の問いは、よく「恐さとおかしさは紙一重、などといわれるがそれはいかなることなのか」といったものであり、前期には「恐怖」、後期には「笑い」に焦点をあてて考えるという構成であった。受講生は約50人、常時出席者はその約半数であった。講義の最後にはリアクションペーパーを用意し、各回の演目のうちもっとも印象に残った演目についてのコメントを求めた。もともと匿名回答であるが、コメントについて論文上でフィードバックすることには了解を得ている。
- (14) 笑いどころが少なく全体に蔓延する怪異感の割には、怪談噺のように「おそろしき執念じゃ」などといって噺を切り上げるのではなく、いちおうサゲはある。恐怖と笑いは紙一重という講義の設定にはぴったりの演目であるといえる。なお、千住小塚原を舞台として語る場合もあり、珍しく上方で演じる桂春之輔は新町の四つ橋と設定している。猫ババする金も五十両から百両までさまざまであるが、演者ごとのバリエーションは多岐にわたるので、以後の演目も含め、本稿の趣旨に直接関係しないようなバリエーション
- (100)

ションの検討は省略する。

- (15) 西本晃二の有名な研究によって、グリム童話やイタリア・オペラなどヨーロッパの民間伝承からの出自や成立はかなり明確である [西本2002]。なおこの演目はとりわけ演者によるサゲのパリエーションが十人十色であるので、それも合わせて紹介する。すなわち最初にオーソドックスな三遊亭圓生のバージョン（本文の要約）を紹介し、その後、無事灯をつけるが自分のクシャミで消してしまうバージョン（柳家小三治）や、死神が悪意で吹き消してしまうバージョン（立川談志）などにもふれると、生と死が完全な境目によって分断されているのではなく何らかの回路が用意されており、行ったり来たりすることもできるし、生者と死者のコミュニケーションも可能である、といったこの演目の宗教的背景がより鮮明になると思われる。
- (16) 米朝の弟子であった上方落語の爆笑王・桂枝雀をして「もし、ぼくが『はなし家をやめます』で言いだしたときには、『ちょっと待て、落語には“たちぎれ”があるんやぞ』と言うてください。そうしたら、きっと帰って来ますから」と言わしめたというエピソードを小佐田定雄が紹介している [小佐田2015:166]。それだけ枝雀にとっては別格のような演目だったのかもしれないが、ついで枝雀が「たちぎれ」を演じたことは、管見のおよぶ限りない。
- (17) ついでに、全学共通の授業評価アンケートの結果も参照しておく。この授業は、14項目のうち下記12項目で、「平均値+標準偏差」の範囲で当該学部同一授業形態の平均を上回った。「この授業によく出席した」、「教員は授業時間を有効に利用した」、「休講または教員の遅刻が多かった」（他の設問と点数は逆転させて計算）、「教員の話し方は明瞭であった」、「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」、「授業への教員の熱意を感じた」、「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」、「シラバスと内容が一致していた」、「この分野の関心と学力が得られた」、「教員の板書、スラ

イド等の文字は読みやすかった」、「総合的にこの授業を評価できる」。しかし「平均値+標準偏差」の範囲をさらに上回る「++」評価項目はひとつもなかった。逆に「平均値-標準偏差」で評価の低かったのは、「授業中意欲的に取り組んだ（ノートをとる等）」と「予習または復習をよくした」であった。寄席的な漫然たる態度が学生たちに身につけてしまったのかもしれない。「総合的にこの授業を評価できる」という項目と関連性が強いことを示す相関係数を示したのは、「この分野の関心と学力が得られた」(0.87)、「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれるよう心掛けた」(0.77) などであったことから、受講生がその場で集中して宗教〈の・ようなもの〉について考え感じる授業となったことが、総合的な好評価につながったと言えるのではないだろうか。

【参考文献】

- Chidester, David 2005 *Authentic Fakes: Religion and American Popular Culture*. University of California Press.
- Clark, Terry Ray and Dan W. Clanton Jr. 2012 *Understanding Religion and Popular Culture: Theories, Themes, Products and Practices*. Routledge.
- 平野直子 2016 「宗教なき世と人の「つながり」田所承己・菅野博史編『つながりをリノベーションする時代』弘文堂、pp.26-48（第2章）
- 桂米朝 1986 『落語と私』文春文庫
2004 『桂米朝集成 第一巻 上方落語1』岩波書店
2014 『米朝落語全集 第五巻』創元社
- 桂文我 2006 『落語「通」入門』集英社新書
- Klassen, Chris 2014 *Religion & Popular Culture: A Cultural Studies Approach*. Oxford University Press.
- 黒瀬知圓 2016 『現代文 大笑小笑 説教譬喩集』（府越義博編訳）国書刊行会

- Lyden, John C. and Eric Michael Mazur (eds.) 2015 Routledge
Companion to Religion and Popular Culture. Routledge.
- Mazur, Eric Michael and Kate McCarthy (eds.) 2011 God in the
Details: American Religion in Popular Culture. Second Edition.
Routledge.
- 中込重明 1993 「落語「もう半分」と「疝気の虫」の形成」『法政大
学大学院紀要』30:238-220
- 西本晃二 2002 『落語「死神」の世界』青蛙房
- 日本放送協会（編） 2013 『落語でブツダ 落語がわかる 仏教が楽し
くなる』NHK 出版
- 小佐田定雄 2015 『米朝らくごの舞台裏』ちくま新書
- 関山和夫 1973 『説教の歴史的研究』法蔵館
1978 『説教の歴史 — 仏教と話芸—』岩波新書
1991 『落語風俗帳』白水社
- 釈徹宗 2010 『おてらくご 落語の中の浄土真宗』本願寺出版社
2017 『落語に花咲く仏教 宗教と芸能は共振する』朝日新
聞出版
- 宇井無愁 1983 『落語のみなもと』中公新書
- 柳家小三治 2001 『もひとつ ま・く・ら』講談社文庫
- 矢野誠一 2008 『落語とはなにか』河出書房新社（河出文庫）